

不斷光（人の意志、靈化す）

人の精神活動の意志なるものは不識と意識とを論せず、常恒不斷に相續して一にあらす異にあらす、人の心意は常住不動の如くに觀ゆれども實は然らず。形式は常に一なる如くなるも内容は不斷に新陳代謝して常に非ず、然れども其の展轉變易實に微細にして常に一定なるが如くに觀ゆるは宛かも水の滔々たる常恒一體の如くにして而も異なるが如し。然れば經に、人一日一夜の中に八億四千の念ありと。

常恒不斷の活動せる心意を自由に統御して一定せる目的に向つて進行せしめて横専放肆ならしめず、不斷の活動を至善に向はしむるものは如來の不斷光なり。

一日一夜八億の活動を盲目的に動くものは即ち三惡四趣に趣向する心意なり。

意志の常恒不斷なる活動に對する原動力の故に不斷光とは名づく。

不斷光の性質を分析すれば如來の神聖正義恩寵の三要素より成れる靈光にして人の

意志を靈化して聖靈の無上菩提心即ち靈的道德心として靈的活動をなさしむるの力也
 意志の信仰は如來の聖光によりて靈化すること、之を世間に云はゞ意志を鍛鍊して自由意志を以て高等なる道德心を修養するの謂に外ならず。

光明なき意志の盲動に二種あり。善と惡と是なり。眞理の光明なき意志はたとひ他に害を與ふる不道德罪惡とまでに至らざるも、宗教的に云はゞ光明なき無明の心意が神の目的を目的とせざる無明より盲動する心意が偶然に善に相應するが故に惡と云はず、善と稱するも眞の至善に非ず、此の無明の動機より出づる善惡を各三等に分ち之を三善道三惡道とす。

人の意志性格が善惡の習慣力に由て或は惡に傾向せると善に向けると其の善惡の意志の發達程度に於て各三等あり。

其の性格意志が邪惡にして其の動機より念々邪惡の心念を衝動し肉欲我欲の最も重きより、日々八億の念を焰々として胸中より吐き出して之を語と行爲とに惡業を積累

するに至るは地獄的意志とす。

次に肉欲我欲の我意的動機の已に病的となりて盲動し八億の念々に餓鬼の業を造作するは餓鬼的意志なり。

盲目的意志に因果の理を信せず。肉體あるを知つて精神あるを信せず。唯肉の幸福をのみ希望し心靈の幸福を求めず。今日の快樂を追求して明日の活計を圖らず。愚痴盲目的生活に安んずるは即ち畜生の意志性格なり。

斯の三類の意志動機より日々八億の念々意志活動が三惡道を作る。

三善道動機

人の意志性格道德の動機に數多の階級あり。道德的動機の最下等なるは傲慢を本とし勝佗的動機より名聞の爲に善を作すも其の意志より觀る時は未だ正善なりと云ふ可からず。名聞の善勝佗の意志より起すが故に。僞善亦道德なり。斯かる動機より八億

の念々三業を動作するものは修羅的意志とす。

人的動機 世俗的情操所謂普通の人情義理てふ動機から世間的道德浮き世の務として又其の風俗習慣に規定せられたる良心の動機より惡を避けて道德的行爲をなすは人間的なり。其より八億念々人間を造り出す意志なり。

天道的動機 世間の人情義理の制裁によりて道德をなすに非ず。自然天真の爛漫たる良心より又天道を怖れ天の萬物を恵むが如く自然の理に本づきて道德の動機として愈々善の三業を動作するは即ち天道的動機とす。

斯の三類は進んで靈の光明を得るに非ざれば其の意志靈的光明たらざれども世間的自然的の道德意志なり。故に三善道の意志的性格とす。

靈 的 性 格

聲聞と緣覺との道德 聲聞的道德とは已に靈光を得たる意志なるも消極的にして、

天然を超え世間の道徳を超えて如來の光明に靈化せられたるも空の一遍に執して未だ如來の不斷光に積極的道徳の靈能あるを知らず。

自ら高く物表に出で其の無我真空の靈的意志は超然として眞天に輝き、我慾肉慾の影だにもなく、其の節操の高潔なる其の戒徳の凜冽なる、玲瓏たる明月の青天に輝くが如く、然れども無意的にして積極的道徳無上道心を以て一切衆生を攝化して自己と同じく大菩提を得せしめんとする聖靈的道心なし。

菩薩の意志は如來の不斷光を以て自己の靈的意志として不斷光の無盡の聖靈の原動力より人の意志を動機として高等なる道徳心として活動する意志なり。

菩薩的道徳とは前の惡衝動の意志を脱却し即ち肉慾我慾の動機を離れ世俗的情操世間の義理や人情から起る志操に非ず。又天真爛漫の美しき道徳心にもあらず。又二乗の靈的利己主義の偏執なるにもあらず。ヴァントが道徳心の動機に最も低等なるは世の法律とか世間の擯斥を怖れて惡を制裁するは下等、次に他人の良心に照さるる事を怖

れ又教育の修身に本づきて三業を制裁して道德の動機となるは其の上なり。世の良心に制裁せられて道德をなすは第三なり。高等なる理想我より自律的に善をするは最高等なる道德的動機なりと。

今菩薩の道德とは最高等なる道德的動機なり。

斯靈的道德的意志は不斷光の勢力が人の意志として顯現するを以て如來の無上菩提心が法界に周遍して一切を向上發展せしめて最終の目的なる神の至善に歸趣せしめ、此法界周徧の大道力が人の意志に實現して不斷の道德的活動をなすにあり。

不斷光の本體は法界周徧にして又人の意志に實現して不斷の靈的活動となる。

斯不斷光と一致せる意志は大菩提心なり。菩提心は高等の道德心にして劣等なる我意感情を制して自由ならしむる意志なり。

斯光は善惡を双照し、惡は目的に背くが故に排除し善は如來の目的に隨順するが故に善に進む。之によりて自由意志あり。

不斷の注意

不斷光は人の意志に對して心靈を照す。自己の熟考となり周到緻密の注意は人の意志に現るゝ不斷光なり。人未だ斯光に靈化せず盲動的に意志を活動するが故に貪瞋嫉憎等と發動す。此が爲に終身相復す可からざる譬を作るに至る如きは蓋し不斷に活動する心意の緊密なる注意缺乏すればなり。注意の缺乏したる時に忽ちに感情は逸して專横に盲動す。是失敗の原因なり。然れども其の根底を探る時は全く平生不斷の意志を統御すべき光なきが故なり。不斷の光が嚴密なる注意として自己を返照せば道德的行爲に於て躓きはせまじきものを。

不斷光の要素たる神聖の光が人の意志を照して、我意罪惡が我を汚して闇黒に誘引する結果の實に恐るべきを先見する事あらば背くまじきものなるにと。

自己の意志を統御すべき心靈は即ち如來の神聖の光によりて理性の光として自己の

すべての精神活動を統御するものなり。常恒不斷に自我の光明昭々として照らし、神聖にして侵す可からざる統治の有るあらば一個人の政治は能く治まりて常に平和にして鬭争は有るまじきものを。人の心意は常に不斷に活動し念々生滅して間斷あることなし。外界には心を刺戟して感覺あり又罪惡に誘惑するの機會充滿せり。最も鞏固にして不斷に注意の光を以て不斷の念々を照して之を統べて善道に向はするに非ざれば端なくも或は感覺の妄塵に染汚せられ又は三惡四趣の意志に迷惑して靈的聖道を失ふの憂なきを保せず。之に對して向上の進路を照すものは不斷光の注意力也。

不斷の基礎

人の精神は常恒不斷の活動にして生滅變易常なき心意が一定せる目的に達せんと欲せば其の根底を鞏固にせざる可からず。例へば大厦大建築物を建設せんと欲するには其の表面に現はれざる處の基礎を堅牢にせざる可らず。人世に立つて一事業を成功せ

んとすれば必ず其の意志の根底を鞏固にすべし。

然るに人心殆し。人の心念は念々に生滅し刹那々に異變す。自己の意志已上に其の基礎を立つべし。即ち家屋は建築の地ぎやうか地盤から築き立つる時は傾動の怖なきが如く、人の心意の根底は一大心靈なる如來の常恒不動の大聖意に依つて之を基礎とすべし。如來不斷光の要素たる神聖は眞理にして眞理は永久不動の理性なり。人は自己の心念無常遷流の頼む可からざるを自覺し、又我なるものは自分勝手なれば自己の都合によりて轉變するものなり。己が意に適すれば非理なる事にも是認し、己が意に適せざる時は理ある事をも摺斥す。如來は眞理の本なれば眞理の光明が不斷に自我を照見する事を知る時は他人の是をも自己の非をも誤りなく知見し、基礎たる如來の神聖の光明に由て自己を返照して常に自他に對す。又時間的にも人の心意は念々に生滅し今年の我は去年の我に非ず。順境の我と逆境に立ちたる我とを異にし、成功の朝の我と失敗の夕の我は異なる私の觀あり。己を判斷する我と他人を批判する

我とを全く同じきにあらざるは蓋し無常遷流の心念たる我なり。此の生滅常なき我を基礎とする時は人心是殆しである。然れども此根底なる大我即ち如來の永久不動の真理より不斷の光明を以て我意志の基礎とし、此の不斷の光明を意志の根底として我を統御し我を指導し我を判斷し我生命とし我活動とする時は我益々向上し終局に趣〜處 必す至善ならん。

成功は不斷光の活動の結果

世に偶々偶然にも貧兒より一躍して巨萬の産を作り一世に豪商の名聲を赫々たらしむるあれば我も亦彼の如くに僥倖を得まほしく希ふものあり。之を羨望し自己も慙る幸運を得んと希ふは甚だ非なり。

抑も他人の成功は偶然の結果にあらず。人事如何に聊少の事たりとも其の原因なき結果あらじ。苟も一事業に就きて成功せんと欲すれば必す其の意志に於て其の目的に

向つて不斷の意志力を以て不斷の光と不斷の熟考と不斷の意力を之に注ぐにあらざれば成り難し。

人は意志の散漫横恣私慾の盲動に結果の實を得る事有らんや。見よ農家の田園漫生の雜草恣に蔓繁せば如何なる沃地たるも憊る田園に善果を收穫する事あらんや。

米果の如く人を稗益する草實は耕耘播種栽培の丹誠なる結果ならざるなし。人苟く自己の目的を成し成功して功遂げ名を成すに皆不斷の意志力を自己の目的に向つて用ひたる結果ならざるなし。

人の心意は甚だ御し難し。漫りに感覺亦感情の爲に動かされて之に盲動せば何事にか成功の望あらん。不斷の活動と云ふも目的に向つて光明ある不斷の活動にして一定の目的に向ひ、之を障礙する處の一切の妨害を排除して専心無二に一の事業に不斷の意志を注ぎ、此には殆んど名狀す可らざる苦心辛苦萬難を経て始めて之に達すべきものなり。經に「心を一處に制する時は事として辨せざるなし」他人の成功談を聞き

一時の感情の爲に煽動せられて自己の成功を望む如きは成功不可能なり。不斷の意志は決して表面にあらはさずして深き意志の内面に活動する不斷の意志力こそ頓て一大事業を成功せしむる原因なり。若しくは政治家又は宗教家又は實行家等その何たるを問はず各其事業の爲其目的の爲に不斷の意志を専ら此に注ぎ之を修めこの目的を達せざれば寧ろ休まずとの大決心を要す。

不斷の發展不斷の建造不斷の練修

宗教の靈的意志を成さんが爲には不斷光の觀念念々に離れず、常恒不斷心念工夫を凝らし不斷の修養は自己の意志を靈化するの第一義なり。若し心に間斷ある時は成功しがたし。

不斷の決心

人の意志の決定は未だ光 明なき決心は盲動的にして自らは是と認めたるも若し不斷光によりて自己を返照する時は昨日の是は今日の非と明らむ。斯る決心は其結果如何を自問自答して既往の非を自覺したので自己の決心は動かさざるを得ず。決心は不斷の意志の修練によりて成立し、決心已に立つ時は其決心より發する意志は不斷に其の決心に隨順す。自己の決心は自己の心の恒にして不斷即ち平生の決心なり。

光 明中の決心は闇の意志に破らるゝものにあらず。盲目的意志決定は必ず光 明の爲に破らる。

意志薄弱なる人は自ら決心する事に躊躇す。自ら決心する事能はざるものは何ぞや。意志の鍛錬未熟なるによる。

意志の鍛錬は即ち不斷光なり。此不斷光と一致する意志は鞏固なるが故に眞勇氣なるが故に決心明了なり。

決心の自ら判然たると否とは不斷光を得ると否とにあり。他に原因あるなし。

意志の不斷光は吾人が運命を左右する原因なり。

光明と鍛鍊

意志は常恒不斷の活動的心用とすれば、不識的なると意識的なるに拘らず意志に離れたる心あることなし。故に不斷なり。

此の不斷の意志に盲動と明動とあり。盲動とは不識的意志を云ふにあらず。理性の光明を離れたる意志の活動なり。意志の鍛鍊とは意志に不斷の光明を得るにあり。人の品性も人格も此光の光動と盲動との如何による。

たとひ如何によく働くとも私慾肉慾の盲欲の動機によりて働くものは高等なる人格と云ふ事を得べけんや。

人格も品性も成功も自治も鍛鍊せる意志即ち不斷光の活動の結果に外ならず。人の人格成功等が表面に現るるに就ては其裏面に常恒不斷永へに燃えつゝある意志

の光が離る可からず。

不斷よく熟し不斷の光にして常へに意志に輝く時は自由自在に之を操縦し其の便宜に隨て機に臨み變に應じて無碍自在を得べし。

意志の鍛鍊即ち精神の光 明なるが故に、斯光一明加はらんか、如何なる危機に處するも身を誤る如きの虞なし。

此 光 明は自我が肉慾を支配するが故に肉我は如何なる危機に際しても身を誤るの恐れなく又失意の境に立つとも失望落膽の場合にも自ら悲に沈淪する事なく、たとひ艱難辛苦に會ふとも自ら昏迷して爲すを知らざる如きの愚を演ずる無きに至るは何ぞや。斯光は人の精神の奥なる真我を喚起し真我が能く我を保護し大に慰藉を與へ又眞我が肉我を指導して常に善道に導く。自己を反省して禍を轉じて福となし暗中に一道の光を與ふるものは不斷光なり。

意志の鍛鍊と云ふことと不斷光に靈化すと云ふことは同一なれども、宗教的に云は

ば靈化と云ふ。

不斷光は益々鍛練すれば彌々意志の緻密となる。其鍛練と不斷との精神状態を物理的に例せば、一切の物質には分子と分子との空隙あり、彼の鐵の如き鑛鐵は至つて其相抱合せる空隙粗大なれども鍛練して鑛滓を除去するに随つて益々緻密なり。能く鍛練したる鐵が名劍と成る如く、之を意志の鍛練益々進む時は意志の活動間斷なく光明態となる。其の分子の抱合最も緻密なるは白金黄金等なり。其の密接の度に随つて又光澤度も強し。人の意志空隙なき光明は其精神道德的光明として神聖侵す可らざる精神態となるなり。

何人も道德意志なきにあらず。然れども横恣散漫にして私慾の爲に塞閉せられて靈光に間斷の度大なれば遂に平生精神をして盲動せしめて其の習慣が竟に光明を覆ふ。人に賢と愚と分るゝ所以は光明的意志の不斷と間斷の度の如何に由るのみ。凡人と雖も光明的意志無きに非ず。

然れどもまことに間隙ばかりにして忽ちに闇となる。八億念念の中に光明生活は

少時にして千分の一にして餘は盲動なり。賢人は光明に空隙の少なきなり。

人格の圓滿と圓滿を缺くと云ふも亦然り。能く意志の鍛練よく成熟せる人は意志が空間的に空隙なき光明あるものなり。

意志が空間と時間とに於て間斷なき靈光熾然たるものは賢人なり。盲動なるは愚人なり。禪に正念相續と云ふは意志不斷光なれとの義なり。念佛念念不捨離、憶念不斷と云ふも不斷的意志ならしむるためなり。

意志の空間的、光明的、圓滿とは慈悲、智慧、安忍、克己、剛毅等の諸の道德の完全なるを云ふ。或は智慧あれども慈悲を缺き剛毅にして忍辱をなすこと能はざる如し。凡ての道德に於て缺乏なきを空間的の間斷なきものと云ふ。

平生是道とは不斷光意志に常に輝きつゝある時平生是道なり。

不斷光と中庸

世に賢人と愚人と、君子と小人との分るゝ所以のものは意志活動の盲動と明動との別なるによる。人一日一夜八億の念あり。小人と雖も道德的光明の意志に發せざるはなからん。然れども是電光の如く暫時にして忽ちに消失す。八億の念々を常恒に照して太陽の如くなるは即ち不斷光に由て活動する意志なり。念々常に滔々と清澄なる泉の流出するは君子なり。濁水ならば小人なり。

全く不斷光が自己の意志的に能動的に發動するに非ざれば眞の不斷光の意志にあらず。例へば他人の德行光輝赫々たるの名譽を稱せらるゝを聞いて、己も亦同じく名譽を貪るが爲に一時感情を起し又他人の勝れたるを羨んで一時の勉強を急に思ひ立つ如きは決して自己の意志不斷光にあらざるなり。

不斷光は自己の眞髓意志より能動的に活動する義なり。謂ゆる中庸偏よらず。倚ならざるなり。或時は畏敬すべき君子たる如く或時は卑賤すべき小人たる如きは全く意志の統一を缺きたるなり。不斷光無きが故なり。又己が情に適ふ人に對しては情に適

せざる人に對すると其姿色を異にする如きは是感情の爲に意志の中庸を奪はれたるものなり。

中庸に、爵祿をも辭すべし白刃をも踏むべし中庸をば能くすべからずと。人は一時の感情にて如何なる名譽をも爵位をも勳賞をも感情興奮せる時は之を辭する事もあるべし。亦白刃石火の下をも敢て恐れざる事もあるべし。然れども此等は唯一時の感情の興奮が動機となりて敢爲せん事なれば是れ平生の事に非ず。人は平生不斷に冷靜な意志より活動せるに非ざれば中庸なる事能はず。過不及なき中庸は即ち不斷光の意志活動なり。

意志は中庸なれ。大敵にも恐るゝ勿れ。小敵を侮る勿れ。外界の刺戟の爲に働かざるゝ勿れ。不斷中庸なれ。

意志鍛練する時は外界の刺戟に對して驚動せられず。誘惑せられず。君子の中庸に安立するは是不斷光の賜なり。

不斷光は充實する力

人の心意の勢力は不斷活動なる意志の力なり。能動的に此不斷發動の意力を積累する時は非常の心力を起す。喩へば蒸氣力充實するが如く精神一到何事か成らざらん。不斷意志力の不撓不斷勇猛進趣あらば如何なる事業か成就せざるべきぞ。西哲が「意志力は萬能なり。以て金鐵をも破る可く以て山岳を動かすに足る可く、以て人心を感激驚動せしむるに足る可し。たとひ天地に隆替あるも意志の力は三軍の力も以て奪ふ事能はず。あらゆる人間社會の成敗の動機は一として茲に萌芽せざるものなし」と。意志をして最も不斷密嚴なる力を充實せしめて一毫の間斷なく金剛の如くに鞏固ならしむる時は金鐵をも碎くべし。火も焼く事能はず、水も漂す事能はず、刀及も割る事能はずとは是意志の金剛の如くに鞏固になりし時なり。關將軍が一たび怒奮を發して叱咤する時百萬の軍勢一時に破るとは最も不斷の意志が最も牢強に集中したる力な

り。軍人が彈雨の中に立て彈丸も能く射る事能はざるは意力の不斷に由りたる功果なり。念力強盛と云ふは同じく意志の不斷に密接したる力なり。

不斷の意志力を一時に集中する時は非常なる力となり平生不斷に活動しては中庸となり。平生不斷は沈着にして非常の不斷力は鞏固に凝結して金剛の如く空隙なき故に非常の場合には非常の意志を凝結し平生には常恒に空隙なき注意力思慮周到なる意志の力となりて目的の正確を得せしむ。是不斷光の意志に充實すればなり。

至善に到達するは意志の目的

人生終局の目的は圓滿なる人格至善に到達するにあり。圓滿なる人格は佛陀是なり。至善の極は極樂是なり。然らば人は何を修して圓滿なる人格佛陀と成り至善なる安寧國に到達する事を得るや。

圓滿なる人格とは最も能く意志の鍛練意志の光明赫々として間斷なく中正を得た

る人を聖人と云ふ。人は生れ稟けたる資性天稟にして其の天賦の器相同じからざるに
 もせよ、各自は自己の資性を圓滿に完全に發達し遺憾なきまで實行して其の天分を全
 うし全力を盡して已らば足れり。人己が天稟を完全に鍛練し圓滿に發達し天分を盡す
 時は佛子たり、菩薩たり。水晶は水晶の性を顯はし金剛石は金剛石たる資性を顯はす
 べし。強いて水晶を琢磨して金剛石と爲せと云ふの謂にあらず。

世に各自の意志即ち道德意志を完全に鍛練して其人としての天分を盡したるものは
 圓滿なる人格なり。

人世に惡人と目せられ情弱者と名づけらるゝ人にも精神の奥室には當に光を放たんと
 する靈性の伏藏するあらん。之を佛性と曰ふ。斯性能を有し乍ら自ら之を開發し光
 輝を赫々たらしめ光明を活動するの意志なき者は實に是罪人たり。苟も常識を備ふ
 可き資性ある上は自己の資性を完全に發展し天分を盡すの志なかるべからず。光明
 教會が世人を勸告する事は各自己の伏藏奥室を開發し全力を盡して倒れて止まんとま

での意志を立てよと云ふにあり。是苟も佛性を具備して人間と生れたる第一の本務なり。斯人生の本務人間としての天分盡さずして可ならんや。此本務を盡すの第一要件は意志の奥なる心靈の光明を以て凡ての意志活動を偏邪を去り中正を得て益向上し至善に向ひ其天分を盡すにあり。斯意志をして目的を達せしむるものは不斷光なり。汝が意志、何に對しても不斷光を以て注意せよ、時間的にも不斷に熟考せよ。

心 靈 と 氣 質

不斷光に平生と非常との別あり。平生には不斷の光意志即ち本心の光能く自己の氣質を返照し自己の氣質の偏執を自覺す。此偏執を固守するものは全く鍛練の足らざるものなり。

能く志氣をして偏執して中庸を失ひ亦時間的に或時は物に熱中し或時は冷却し心意中庸を得ざるは未だ鍛練足らず、本心の光なく唯形氣の質に一任するが故なり。人心

是殆しとは氣質に偏するが故なり。

人形氣の質なるものは若しくは遺傳的に又は習慣の力よりして其の人々の氣質に稟けたるもの、各相同じからず。或は貪戾なるあり、又物に凝結せるあり、陽氣なるあり、陰氣なるあり、急性なるあり、緩性なるあり。各自其の偏倚せるありて天性の自己の偏執は自ら弱點たるを自覺して之を淘汰して而して後初めて中庸を得るなり。高等なる人格と爲るべき事を知らず、自己の稟けたる偏執は自己の氣質に一任する時は益々偏執の習慣となりて氣質の爲に中庸を失ふ。本心の光明によりて偏を去り中を得、邪を除き正に復す。此中正を得て平生中庸を得たるものは本心の不斷光なり。氣質は偏執あるが故に或事には熱中し或事には冷淡にして自己の氣に適する人をば偏愛し適せざる人をば憎惡す、本心光中正を得る時は偏執の失に陷る事なし。

中正を得ざるものは圓滿なる人格たる能はず。不斷光は聖靈が偏邪を去りて中正の意志として不斷に靈的活動し自己を正し又他を正しうするにあり。

不斷光の要素

不斷光は如來が衆生の意志を靈化する心光なりとすれば其要素は如何。即ち物質的の日光に光熱化の三能あるが如く如來の心光にも智慧と慈悲と靈化の三要素ありて人の意志に理性の光を與へ氣質の垢を脱却し靈的活動の原動力と爲る所以のものは即ち如來の神聖と正義と恩寵との三要素是なり。神聖は如來が行爲を照す智慧の光明にして眞理を悟らしむ。智慧即ち實行を照す智慧なり。人の良心と實現して自律的に邪惡を排きて正義に向はしむ。正義は中正公明にして偏邪と惡非を斥けて正義に向ひ、如來正義の光によりて向上至善に到達するの勢力なり。吾人は神聖正義の光に由て自ら正義に進行むべき本務あるも如何せん肉我は私慾に覆はれ煩惱に惱まされて是折角の人界に生を受けたる甲斐もなし。墮落の淵に沈み三惡に淪まん事寔に淺ましきことなり。憊る漢には如來の神聖の光も正義の明も菩提の目足なきものには何ともする能

はす。焉に於てか如來の大悲、子を憐むの慈悲よりして吾人の靈を回復し圓滿なる人格とするは如來の恩寵なり。恩寵とは親が子に對する愛の如し。親が子を養育する如く人の心靈を開發し靈育するものなり。

神聖は不斷の光明、正義は不斷の勢力、恩寵は不斷の靈的活動の原動力にして此三要素を以て不斷の靈動の本なり。

神 聖

如來は神聖にして吾人の意志即ち行爲の指導者にして吾人が實行の正道を見せしむるものなり。

如來の神聖は眞理の光なるを以て眞理には無上の權理ありて何人も眞理の命令には服せざる可からざるものなり。

眞理は永遠の光にして萬物は眞實にあらず、眞理は萬物の上に超然として輝き萬物

は眞理しんりの光くわう明みやうに由よつて在あるなり。眞理しんりの光ひかりが人ひとの心しん靈れいに在ありては不ふ斷だんの活くわつ動どうに正せい道どうを與あたへて誤あやらず終局しうきよくの目的もくてきなる涅槃ねはんに導みちびくものなり。

人ひとは無明むみやうの盲動まうどうによりて一切さいの行爲かうゐ幻妄げんまう迷謬めいびやう虛偽きぎの誇張こちやうの言語等げんごとうを以もつて己おのが心こころを汚けがし人格じんかくを破やぶり品性ひんせいを汚けがし德行とくかうを害がいし三惡六動さんあくりくどうに迷没めいぼつせしむるものは無明妄動むみやうまうどうなり。此これに由よつて因緣相待いんねんあひまつて生死しやうしに流轉るてんし迷没めいぼつを出いづる能あたはず。

無明妄動むみやうまうどうは虛偽きぎ自ら欺あざむき自ら賊みづかひて惡道あくどうに墮落だらくせしむ。眞理しんりの光ひかりは如來にやらいの實踐じつせんを照てらす智慧光ちゐくわうなり。此光このひかりによりて人ひとの至誠眞實心しせいしんじつしんを開現かいげんし無明むみやうの眠醒ねびりよめて眞理しんりの日ひは永とこしへに照てらせり。

眞理しんりは普遍ふへん的てきの道德律だうとくりつの本源ほんげんにして自らを律りつするのみにあらずすべての人ひとをも眞理しんりの標準へうじゆんによりて律りつすことを得う。如來にやらいは眞理しんりの源みなもとにして眞理しんりを體得たいとくし此眞理このしんりと一致いちしたる人ひとは皆佛陀みなぶつだなり、聖者せいしやなり。斯光このひかりを知らずして無明妄動むみやうまうどうの生存せいぞんをなすものは凡夫なんぶなり。

此神聖なる真理の光は人の行爲に對して八正道を得べき處の光明にして是道德を自律的に導く處の本尊なり。

戒律は自律あり他律あり。自律とは世間の法律とか又は世間の制裁に由らざるも自ら神聖なる光を標準として諸惡は真理に背くが故に自ら制止し、衆善は真理に順するが故に自ら進んで此標準に隨ふ時は自ら自己の靈性を清淨にし真理の光を自性に顯さんが爲に自己を律す。是諸佛の真理に準するの誠なり。

自己の心性を汚すものは他人の預る處にあらず。自己自ら自己の靈性を汚す。自己を賊するものは即ち自己なり。自ら欺き自ら墮するは是誰の過ぞや。

如來は真理の源にして而も真理の終局なり。故に如來の目的に隨つて圓滿なる人格を得。最終の至善に到らんと欲せば其の真理の光明を標準として己を律すべし。世は無明なり。我を欺惑し我を闇黒汚惡の獄中に陥らしめんとするの動機は世に充滿せり。我が眼と耳と口腹との慾よりして我を迷はして墮さんとし又我執、情慾、惡念、

惡見の魔網に懸つて品性を零落せしめんとす。

靈性と人性

人は深奥の意義より云はば成佛すべき靈性即ち如來の子なり。精神の奥に神聖侵す可らざる靈性光を放てり。然れども全體より云はゞ生理の欲に充されたる動物なり。能ふ限りは唯肉慾我慾を目的とし永遠の生命をも眞理の光をも顧みず唯現世我の慾を恣にせんとするにあり。

人に眞實と虚偽とあり。人の虚偽を爲す所以は靈我と肉我との二面あり。靈我は本より眞實にして自ら昭々として善の稱すべく惡の賤しむべきを自覺せり。自我が罪惡を自ら賤しむべきを知り乍ら自ら肉我我慾を制止する事能はずして自ら寛容す。爲すべからざる事を犯す時自己を制する事能はざれば無能の毀りを恐れて自己の非を覆ひ隠さんが爲に虚偽をなす。若し人にして善惡是非を判斷し識別するの智なからんか、

恣麼の惡を犯すも自ら慚愧なく又隠覆するの要なし。故に謂ふ、純靈性なる聖人と純動物の意志なるものとは虚偽あるなし。聖人は靈性の光明によりて己を照し惡及不道德ある事なし。故に惡を隠蔽するの要なし。又純動物の意志の者は自己の理性なきが故に自己の非惡を慚愧するの智性なく唯本能的に生理的に飲食し惡を作す。他に害を與ふるも自ら之を惡たるを意識し分別するの理性なきものは自ら非を隠すの慮なきが故に虚偽ある事なし。獸類の如きは虚偽なきなり。善惡邪正を識別するの理性と動物慾の性と兩性を具しながら理性が動物我を制止するの力なきものにして始めて虚偽あり。

自己を制止するの勇なきを自ら慚ぢて之を他人に隠蔽するが爲に虚偽と爲る。或は又何にしてもすべての非惡は己が私慾を制止するの意力なきが致す處なり。理性は之を自ら非惡と認識するが故に他人に對して偽るなり若し全く自ら行爲に於て非惡なるを認識する事なければ之を隠蔽するの理なし。然る時は虚偽とすべきなし。

又自ら内に實德なく虚名を貪り利養を釣らんが爲に虚飾して自ら偽善偽德を衒ふ如きは是全く無明の致す所なり。虚偽の思想誇張の言語、幻妄迷謬は肉我の迷より致す所なり。肉我は本假りに有りて真理なるものにあらず。故に肉我は肉身と共に滅亡に歸せざるを得ず。必ず滅亡に歸すべき運命を有せる肉我が虚飾せんが爲に虚偽の思想と誇張の言語とあり。諸の幻妄迷謬の甚しきなり。一切の罪惡は此迷謬より生ず。永遠に生存して常へに滅せざるものは真理なり。

神聖の真理を得たる人の至誠心は即ち如來心なり。是の至誠心のみ如來心と相應す真理の基礎の上に立てたる建物は磐石を礎とするが故に永久に顛向する事なし。虚偽の上に立てたる家屋は如何に誇張の言語虚構如何に巧妙なるも久しからずして傾き倒れん。如何に巧みにあやつり巧言令色人をして甘心せしむるの妙術を得たるも金銀を鑲めたる建物の如くにきらびやかなるも、眞實の礎なきものは一として倒覆せざるはなし。

汝が佛性自然より出たる思想と言語とは雪の皎々たる如くに清かりしなり。至誠心より不斷に流れ出づる泉の言語は清く潔く質直と端正にして最清に衆人は是を飲料水其他凡てに用ふることを得べし。虚偽の濁心より流れる水はすべてに用ふる事を得ず。

不斷の意志にして正直誠實の缺くるあらば自ら詔曲となりて品性は卑劣に陥り思想は淺劣となりてつひに生きくせる活氣なく清潔新鮮なる活氣なく靈氣の生命失ふべし。

人の天性の本然は詔曲虚偽なるにあらず、靈なる光なく闇黒と野卑なる意志とより私慾を恣にしながら世俗的名利を貪るよりして虚偽詔曲の卑劣なる意向となる。遂に自己を返照する光なく自己を欺き其野卑なる習慣は屢々して自ら醫す可らざる病となり、遂に天性を害ひ徳性を賊ふ。自己の本然の自性を如來の神聖眞理の光によりて自性天真に立ち歸り自性の清き心より生じたる言語と行爲とを回復せんとの不斷の意

志の力によりて漸々清きに復り自己の良心に疚しき事なく他人の良心にも愧るの色なく清白眞實の人となる事を得べし。是自己本來の面目と云ふべし。

光明の眞性を顯すものは至誠心なり。光を覆ふものは虚偽なり。

眞實は人の本分

言語は自己の心意を他人に明す光なり。即自己精神の事實の眞相を顯すにあり。吾人は世界にあらゆる事を自ら直接に見聞すること能はず。他人の言語行爲を信じて其事實を知る。若し人眞實を言はざるのみにあらず殊更に捏造して目前を瞞着する者あり、世上之を知るも制裁を加へず。或は其虚偽を隱匿し又之を庇護するあり。世人之を知らず、損害を受けること多く、世上を大に妨害すること多し。故に事實の眞相を告げざるは人の本分を盡す能はず。

眞理の標準に順ひ眞理の光を以て自我の光明とし斯至誠心よりして發す見解は正

見なり。正見は眞理の光によりて至善の涅槃に至る正道を照すものなり。正見は眞理の標準に順ふが故に私慾幻妄迷謬虚偽の闇は消滅して跡なし。故に正見は眞理を標準として至善の港に到るの燈燭なり。

眞理の標準なく正見の羅針盤なければ無明迷妄虚偽の航海は遂に我執情慾惡念の闇礁の爲に惡道に沈没の憂を免れず。誠實端正は如來が人の精神に賦へたる天性なりと云べし。然るに肉我は其の人慾の私にして迷謬の魔の爲に誘はれて自己を墮落せしむ。

神聖、誠實、有のまゝ少しも構造なく虚偽なく自ら知り自ら信じたまゝを語りまた實行するは易き事なれども、肉我の虚榮は還つて安きを去つて自ら難きに就き、實際に利益なき虚偽を自ら甘んずるは實に意志不斷光明なきが故に眞の勇氣沮喪し遂に世の批評を恐れ他人の攻撃を怖れ自ら躊躇して正直に直行する事能はざるは如何にも淺ましき振舞なり。眞實心のみ神聖と相應す。

如來は眞理の源なれば眞實心より生ずる事にあらざれば如來の聖光を得る事能はず。縱令口に佛名を稱へ祈禱を捧げ讃歌を奏するも其心内に眞實なきが故に其精神は如來の聖光と相背反す。斯る輩虚しく勞して得る處なし。されば聖導師は至誠心を釋して、衆生よ如來心と相應せんと欲せば身口意業の行爲必ず眞實の意志よりなせよ。外面に賢善精進の相を表して内に虚假を懷き貪瞋邪僞奸詐百端にして惡性侵めがたく事蛇蝎に同じきは三業に於て身心を苦勵して日夜に苦勵して頭燃を炙が如くなるも雜毒の善と名く。其内心に於て毫も如來の靈なる光と相應なくんば將た何の功かあらん。唐らに勞して自己に於て益なし。如來眞理の光 明は自己の精神に於て得べきのみ斯聖光を獲得するにあらざれば祈禱其れ何の詮かあらん。

神聖なる光 明を得て其光 明によりて自己の行爲を照らし亦他人に對するに眞實心となるべし。

眞實なき行爲は苦勵亦唐らに施すなり。至誠なき信行は勞して功果なし。譬へば山

林に松杉を植ゑんとて先づ其苗木を作らんが爲に其種子を播かんに實には松杉に非ざる似而非なる物を以て偽つて之を松杉の種子として播下し百般の苦勞を経て之を栽培の勞を経るも何の功果あらん。信仰亦然り。至誠に眞理の聖光を以て種子とし如實に之を修養するに非ずんば爭でか自己の天真光明佛となる事を得ん。

眞 實

人として世に處するに必ず一定の法則なかる可らず。道德的秩序は即ち吾人の遵奉すべきものなり。吾と人との間に行はるゝ道德の要素たる眞實は如來の眞理なるものゝ一法として此眞理の法則を守るべし。人は言語を以て自己の内心にある事を他人に表明す。他人は此言語の表明によりて自己の内容を知る。又文字により或は形容によりて自己の思想を交換する事を得。吾人は五官の事實を見聞し亦之を想像し得るのみならず。亦事實を創造するの自由を有す。自己の想像を言語文字に依て他人に表明す

る事を得。自己が經驗したる事實を虚構せず。有の儘に語るを眞實とし全く自ら直覺せし如くに他人に表示するものは眞實の人たり。若し然らず自ら經驗せし思想を異りたる事實を以て他人に表示する時は之を虚偽と云ふ。

言語を以て他人に表示するには事實の眞相を顯すべし。全體人間が直接の經驗は限りあり。されば他人の言語行爲を信じて知るにあらざれば人生の出來事を知るに由なし。若し人にして眞實の外虚構に出る事あらんか、吾人は誤解に陷るの恐れあり。然るに世に故意的に事實を構造して他人を瞞着する者あり、是自ら欺き他人を欺くものなり。他人それが爲に損害を被る事多く虚構者自身に取りても其眞相を暴露するに於ては信用を失ひ感情を害し事業上に妨害あらん。

眞實は人間の本分たるを盡すの道なり。

殊更に虚偽を虚構するは人間の 我の私情に出づるものなり。人には自ら善を作さざるも善の聞を好む者、虚榮と虚名を貪る情よりして虚偽をなす。人は自己の虚名好

名聞なければ發達する事能はず。此情必ずしも惡なるに非ず。然れども自己が賞揚せられんが爲に膨大にし或は自己の短所缺點を隱覆する如きは甚だ非なり。尙己が名を高からしめんが爲に他人の非を揚るの傾あり。斯る弱點は人は我より已上の自我の光によりて常に己を照すの明無き時は眞實を表示する事能はず。

虚偽は神を欺き己を欺き亦他人を欺くが故に自ら欺く者は自ら自己の人格を重んぜざるの致す處。自ら欺く、孰か汝を信せん。虚偽は屢々する時は遂に習慣を生じて竟に全く虚偽の人となるべし。虚偽は己を染汚するもの、一切の罪惡は此腐敗せる穢物より發生す。

眞實の利益

眞實は我と人との間に於て表裏なく明鏡の相照す如く隱覆する處なく互に眞實を以て交誼をなすは實に如來の眞理の光明中の交なり。

此光明の中には交情は彌暖まり馥郁たる香氣百花爛漫たるあり。平和永久の平和常住の麗はしき色は眞實心よりなす。

眞實は光明虚偽は闇黒なり。眞實の光明の在る處には諸の神明と聖人との在る處、闇黒虚偽は諸の惡魔邪神の伏在する處、眞實の光明ある處は常に平和なり、諸の幸福は此に聚り虚偽闇黒の處には諸の災禍鬭諍此に發す。

眞實心には世に恐怖すべきものなく眞の勇氣果斷少しも臆面なく事を處す。

眞實の光の前には匹夫匹夫と雖何人も侵す可からざる勇氣あり。虚偽は高位顯官と雖も恐れなき能はず。

眞實には清淨潔白光明赫々たり、品格自ら高尚なり。

虚偽は闇黒不潔卑劣陰險小賍詐偽等の源たり。

不斷眞實

人の世に處するにたとひ才美なくとも然れども至誠正直は片時も缺くべからざる意志の光なり。光ある言を以て自ら信する所を語り自ら経験したる處を有のまゝの表示するあらば何人に對しても恐れ憚る處なし。平生不斷に眞實の光なしに世に處するものは實に危険なり。虚偽の成功は或は一時は隆盛を極むとも竟には信用を失ひ亡ぶに至るべし。

人は才智銳利ならざるも奮闘の勇氣なくも誠實正直を以て貫くの意志あらば必ず如何なる物事にも恐れなき勇氣は生せん。

虚偽は眞理の光の前には價值なし。たとひ僥倖を得て人を欺き一時の成功をなすも自ら省るには何の貴かあらん。静かなる夜の人眠に静まる時に自己の爲し來る事を神聖なる光明の前に點檢し來らば如何。自ら責め己を問へしむる棒は良心より戴かざるを得ざるべし。

自己の精神生命を不斷に永續し益々靈的生命を相續ならしむるものは眞實なり。

眞の勇氣は神聖なり

神を畏れず、人の前を畏るゝものは事實を表示するの眞勇なきなり。眞に神の光を畏るゝものは大膽なり。勇敢なり。永遠の光なる神聖を畏れざる者は唯人の前のみを畏れて人の前をのみ虚飾して眞實を語るの勇氣なく、有りの儘に語るの勇氣なく詭曲にして唯或一面のみを表示するも常に裏面を陰覆す。其内面の漏れん事を恐るゝ故に活氣無く行爲に生命なく他人をして其精神の那邊にあるかを疑はしむ。自ら他人をして疑はしめ忠實に義務を盡す能はず。

正直に事實を表白するの勇氣なき時は其意志を薄弱ならしめ果斷力を鈍くし其成さんとする處成功するなし。

神聖は眞理なり。眞實は神の聖が人の精神に顯れたるものなり。故に眞實には無上の威力あり。如何なるものも侵止すべからざるの威力あり。斯光の前に抵抗する者な

し。虚偽は如何に獐狂なるも唯虚勢を以て世を虚喝するものなれば眞理の光現はるゝ
 時は忽ちに其勢力は消滅せん。虚偽は眞に勝つ事能はず。邪は正に勝たず。此眞理は
 萬古不易の理にして不斷の眞理なり。

眞實の不斷光

方便なる虚構を用ひざる爲に處世上大に失敗したりと謂ふなかれ。眞實にして失敗
 するの理なければなり。人の處世上の成功と失敗は一時の上に定む可からず、終まで
 終始一貫して始めて最後の勝利を得るものなり。

不斷光の眞實は感情の昂低常なきものに非ず。至誠神の如くなる忠直公明正大秩序
 整然として私に犯す事無く表裏なく隠顯なく眞理の光を以て己を制し表は温にし
 て内に強く外は柔和にして内は勇敢なるは即ち眞實なり。

宇宙の眞理の光を以て自己の精神とし常住不斷に自己の心意を支配し精神に神聖正

義の日月双び照して不斷の言語動作作法に至るまで眞實なるものは終局眞理の至善の靈界に進み其極むる處、即ち佛々平等の圓滿至善の佛果なり。眞實に一貫せよ。念々亦眞實なれ。最後の勝利として成佛せん。

不斷光の正義

神聖は眞理の光として眞實心として神の命令として眞理の標準として善惡を明かに照し分つ。而して其光明によりて善惡邪正を明かにし即ち吾人が心に邪と惡とを捨て正善を擇びて就かしむるは即ち正義なり。

神聖の光なき時は邪正を知見する能はず。正義なき時は邪を捨て正を取るなし。正義は消極的には邪惡を捨て積極には正善によりて本務として益々向上的に至善に向つて進趣するにあり。

抑吾人が邪惡なるものは何よりするや。吾人は心靈なる本心と肉の我とあり、肉

我が肉慾と我慾を満足せんとの私情より起る心意は邪惡にして心靈の光明より心意を衝動して發する我は正善なり。

正義の消極的方面なる邪惡を捨てるには克己心と勇氣と無かる可からず。正義の觀念には道德的の義務觀念あり自己を高等に向上せざる可からず。正義は一定の標準に則り自律的に己を制裁し公明正大なる判官として我慾を制し神の命令として私心を伏す。自ら責任を有する我は人なり、神の聖旨を被りたる人なり、一切の惡を制止して一切の善の行爲を果すべきの人なり。

消極的不斷光

不斷の意志の圓滿に發達せんには決して他人に依頼し又は自然の時の到るを待つて達せんと欲する如き薄弱なる勿れ。自己の意志は自己自ら鍛練し自己を制し自己を克するの本務あり。自己の本城を嚴護するものは自己なり。自己に潜伏せる心靈を顯動

するにあらざれば自己を尅し自己の光を發する能はず。意志自由圓轉滑脱自由不斷の活動をなさんと欲せば克己摧勵によりて得らるゝものとす。

正義の妨害者は我なり。此我意が心靈の光を覆ふて暗黒に墮落せしむ。我なるものは專横放恣自分勝手にして得る限りは唯肉我の慾を逞うせんとす。專横放恣動物欲の强者伏弱、殘害剋賊奢肆驕縱、肉の快樂を恣にせんとす。

されば聖典に都て義理なく法度に順せず奢淫驕縱にして各快意せんと欲す。心に任せて自恣にし更相に欺惑し、心口各異に言念實なし。佞諂不忠にして言を巧みにし媚び諛ひ、賢を嫉み善を謫して冤枉に陷る。各貪瞋痴を懷いて自ら己を厚うし多く有らん事を欲す。尊卑上下同じく然りと。斯く横恣の我意の爲に全心を横領せらる。斯る我意私情に打勝つの意志を克己とす。我意横暴、岐路に入り秩序宜しきを得ざる意馬を調御して正當善良即ちあるべきやうに克復せしむるの謂なり。斯横暴なる心中の賊を征服せんと欲せば其賊の所在を明察し賊の巨魁を捕縛し之を征伐せざ

るべからず。此賊をして恣に其行爲を縦す時は、竟に己を索へ崖岬に陥らしむる事を免れず。人の精神が智力と感情と意志とに於て、智力は教育の結果大に進みたるも、智力に偏進するの傾あり、學校に於ても社會に於ても、智力的に偏り、智情の偏進の結果、神經過敏となれり。心意動き易きは、自己を修練せずして、唯智識のみを進めたる故也。宗教意識に於ても、自己自ら修行の結果、自得する處あれば、自信力強し。自信力強ければ、果斷力又強し、果斷力なきものは、勇なきなり。自己の一切の智情意を統一して己を調御するは、克己なり。克己は、智力と感情を支配して、自己に隨はしむ。己に剋つて禮に復ると云ふも、己に克つて聖光によりて、不斷に活動せよと云ふも、相同じ。

眞 勇

一時名譽とか、或は一の感情に刺戟せられて發するの勇は、眞勇に非ず。百般の成功は如何なる場合にも貫徹する勇ありて始めて成るものなり。深奥なる意志の不斷光より

湧き出す勇氣にして如何なる困難にも他の妨害にも驚かす恐れず常に泰然自若として自己の目的を達すべし。自信と一の目的に向つての不斷光は是無限の勇氣の原動力なり。人、深奥の意志の底より鍛練したる勇氣を要す。

不斷光の活動を撓まず屈せずして聖意を實現するものは勇氣なり。邪を伏し正を顯すものは勇氣なり。聖旨を斯身に實現し光明赫々たる人格圓滿たらんとするは聖旨を理想とし此理想を實現する者は實行なり。

人如何に聖旨を以て理想とするも大なる義務を有し責任を果さんとするも遺憾なしに之を貫徹せんとするには勇猛不撓の意志なかるべからず。此勇氣の缺乏せんか、迪も自己の抱負を貫徹し得る能はず。

如何なる事にも勇猛に不斷の精進に實行する時は何事か貫徹せざらん。身匹夫より出でて能く其の目的を達したるものは概して勇猛精進の結果ならざるはなし。

大海の水を汲干して如意寶珠を獲んとするの因縁の如く、假令大海の水と雖も勇猛精進

にして屈せざらんには必ず汲み盡すとの鞏固なる意志が如何なる事情の中にも如何なる場合にも屈せず撓まず貫徹したるが即ち心靈界の獨尊たる釋迦牟尼を化現したるなり。意志薄弱にして其の發足したる事業を中途にして枉屈する如きは全く意志勇氣の原動力たる不斷光の缺けたるより出づ。勇氣に蠻勇あり眞勇あり。暴虎憑河の勇は蠻勇なり。良心即ち光明の示現に隨つて自己の私欲を抑へ果斷決行するの勇は眞勇なり。大敵にも恐れず小敵にも侮らざるの勇なり、眞勇は己が我慾の敵を征げて而して如何なる事にも恐れざるなり。獨立不羈の勇なり、自ら善なりと信じたる事は縱令身命を賭しても貫くの勇なり。願を發し所願を力精し、縱令身を諸の苦毒の中に止むとも我行は精進にして忍んで終に悔ひざらんとの勇なり。

克己の終局

我意横恣、眞理の光なき我意が恣に横に勢力を逞うするの此我意に尅て動物

欲望及び感情とを靈性の光明にて鍛練し指導して真理の目的に歸せしむるに、感情及び動物欲望を專横ならしめざる様にするは即ち不斷光による克己なり。

他人に對して理窟に克つは難からず。己に克つは賢者にして能くす。自己の横恣なる貪戾に克ち私情の憤怒を制服し高慢心に打勝つ。實に克己を以て最後の勝利を得んと欲せば常恒不斷に意を制し感情の爲め忽卒にも憤怒を發しまた情慾を制するの勇氣無く、常に熟考の光明缺くる時は漫りに場合の刺戟の爲に心を動かされ己を制伏するの暇なく、竟に煩惱の爲に敗を取る如きは全く不斷光の周到精密なる用意を缺き平生の充分の覺悟なき爲なり。

教祖釋迦牟尼が人の精神に伏在する處の惡魔を征服するが即ち克己なり。魔に五陰魔煩惱魔あり。五陰魔とは色即ち此肉體の慾を満足せんと欲する處より發る魔。此肉體は飽くまで幸福を欲望するものなり。受とは感覺欲即ち五塵の境界に對して眼の欲耳の欲の爲に障られて正しき道德行爲を妨げらる。感情の喜怒哀樂の爲に正しきを障

らる。意馬心猿調伏しがたくして道業を障る智力の奸智と點慧は自己の少き生ま智慧の爲に眞智を障る。是等を五陰魔と爲す。斯る魔障は皆我に屬するもの。斯る身と意との活動を制伏するなり。

佛教の戒法は法性の理に隨順して我慾に克つにあり。陽明が山中の賊は破る事易し心中の賊を破る事難しと。即ち自我が肉我を適當に支配し感情智力等すべて自我の命令に順ふにあり。

克己の眞義は斯光によりて自己の邪見邪思專横なる我意を征服しては、如何に征服せしやを自己に返照し、其非なる不可なる所を排して、正當にあるべき様に實踐躬行するにあり。克己が缺くるならば如何なる勇者智者も又一世に冠たる偉人と云はるゝも竟に肉慾の奴隸となりて自性の光を失ふものなり。

經に帝釋の帝位天に赫々たるを赫かすも情欲の爲に使役せらるゝを免えず、と。すべての虛榮心又肉欲を制伏せる克己心の最強きものは釋尊なり。故に釋尊を世雄と

號する事は克己心に於て最も強き者の謂なり。

歴山大王の大霸業ある大王も女色の爲に捕虜となり、楚の項羽の豪勇無比なるも婦女の爲めに自ら情を制すること能はざるは專横放逸の私慾に左右せられて之を克するの眞勇氣乏しきが故なり。精神健全一世に雄たるの勇者も一朝事情の爲に油然として煩惱の勃起するや曾て圓滿完全たる豪傑を以て目せられたる精神も端なくも根本的に打破せらるゝに至るは何ぞや。智力と感情の爲に勇者たりしも全く克己心の完全を得ざるが爲のみ。此に於ては釋尊及び其徒諸の比丘衆の如きは實に克己心に富める者と云ふべし。

不斷に侵す可がらざる靈光が心の奥に赫々として光りつゝあらば我欲の爲に敗は取るまじきものを。專横の我に尅たんと欲せば正見正義の光を要す。妄見邪想の邪欲の起り來つて己を襲はんとするは正義を無視し自己の人格を自棄し唐らに自己の肉慾を充たしめんとして起るもの、其結果は自己の光明を害し自己を害するに至る。

人の克己の道を講じて失敗する所以は斯光を輕視し徳行の獨立を危くする故にして其罪歸する所己にあり。自己返照して宜しく改革すべし。人一旦私欲横恣となり正義も徳行もなくならば曾て晴快青天の如きの心中も闇憺として精神の慘憺たる無明にさまよはん。眼も眩み事理の正否を見る事能はず、邪思邪行、自己の感情の煩惱は屢昂低し判圖の正鵠を失し、歸する處一生空しく肉の奴隸と成り已らん。

人斯の正見斯の光明によりて正道を踏むに自己の目的誤れるを認め正當の方向に轉向せしむるは肉體の生活に何ら直接に關係なきを以ての故に無益の如くに考ふる者有らんかなれども決して然らず、是人間に生れ人間の本分を盡すものなり。自己の品性を發揮し人格を高尙にし人生を完全ならしむるは人生の一大事也。世界人類の大模範者大師と仰がる者は最も圓滿完全に正義の旗を立て邪念邪思に克ちたる大元帥なり。此の人類の大師に倣ひ其の軌範に順はずんば是真の人にあらざるなり。若し正々堂々正義を以て私欲に打ち克たる師者は何人も敬服せざるなし。

大乘佛教道德歸趣

佛教に依て自覺せざる人は闇黒の生活にして、人生は唯肉體の生活を以て終局と思ひ、精神的に永遠の光明を信認することなく、我何より生れ來り如何にして人生の歸趣すべきかを自覺せず、是等を無明生死の凡夫と云ふ。經に、「世の人自らの智慧を以て生の從來する處、死の趣向する處を知らず、不仁不順にも天地に惡逆して其中に於て希望僥倖して長生を求むれども、かならず當に死に歸すべし。乃至天地の間に五道分明にして恢廓窈窕浩浩茫茫たり。善惡報應して禍福相承く、身自ら之を受く誰の代る者なし。數の自然にして、其行ふ如くに應じて殃咎をうく。命を追ふて縱捨するを得ること無し。善人は善を行じて樂より樂に入り明より明に入り、惡人は惡を行じて苦より苦に入り冥より冥に入る。誰か能く知る者あらん。獨佛のみ知り給ふ。教語開

示すれども信用する者は少く、生死休まず惡道絶えず」と明し給ふ如く、衆生は自ら生死の眞源を覺らず、然れども善惡の業は必ず苦樂の報を感ず。

人は何故に本佛性有し乍ら、自ら覺らずして生死の中に流轉する哉となれば、人靈性具有すると同時に、人間に受けたる形氣の煩惱に覆はれ、佛性は未だ萌芽せず、唯此肉體を保護する處の動物欲が先に發達す。嘗に本能的に動物欲發達したるのみに非ず、智慧迄も唯肉體の欲望を満足せんが爲にのみ發達して、高等なる理想の靈性に萌發せず。凡て精神發達の順序に於ても、初め劣等なる植物性が發達し、次に動物性、次に精神性と發達す。同じ精神に於ても高等なる性情は容易に發揮し難し。榮養と生殖の作用の如きは植物も同じく有する性にて、五官の働きに至つては植物には無く唯動物共通の性である。眼の色を視耳の聲を聽き鼻の香を嗅ぎ舌の味を感覺する如き、動物も人類も共通の作用である。却て高等動物には眼の闇夜に物を視また嗅覺の敏慧なる如きに至つては人類よりも發達して居るなり。却て人類は精神の中の高等なる理

性また進んで靈性が働く處よりして最靈の精神生活に入るのである。道德上に於ても人類は能く善惡邪正また權利義務と云ふことを能く諦かに判斷し推察し得らるる理性なる智力を以て我と彼とを照し合せ、夫で道德上の自らの高等なる理性の智が自らの肉慾や我慾の劣等なる慾を制裁することが出来る。道德上の自己を尅己し抑制する等の高等なる徳性は能く精練せざれば發揮せぬ。

人類は高等なる動物にて、奥底に伏せる靈性未だ開發せざる間は其情操が卑俗たるを免れぬ。いかに寶石たるも琢磨の功を藉らざれば光輝發せず。人の精神の主我意志（本能的の我見、我愛、我慢）が我を本位とし其主我が世俗的情操より衝動また活動して其慾望する處のものは世界動機として世の中の名譽または權利財産位置等の爲に動かされて其心底の浮薄卑俗なること實に淺薄である。故に世の中に吹き荒む八風なる利害とか毀譽褒貶苦樂等の爲に動搖し易く、故に其人生の終局目的なる大事をも敢て自覺せんと要求せず。故に其人格を形成する要素に就ても善縁に遇はば善に向ひ惡

縁に誘はるれば悪人となる。此の如きを輕毛の凡夫六道何れとも定趣なき衆生なり。今佛教は自己の安心決定なき終局目的判然ならざる輩を大に排斥す。是れ恰も國家より戸籍なき無所屬の徒に對する如し。故に宗教にては宗教的人格の一大根本は正しく彌陀の實在者に歸命信賴して永恒に神の國に依止すべきの信仰を鞏固にするなり。無上の大道を進んで最終の人格と常住の平和に行くべき道を菩提と云ふ。一切諸佛は斯大道に乗じて已に正覺を成し給へるなり。之を今宗教的に云はば光明の大道である。此道に入て正しく成就するまでに四願心あり。

一願 生心。是從來の主我主義の我、善惡不定意志なりし我が心靈に生れ更りまた靈に新らしく心が生れたいと云ふを願生心と云ふ。靈に生れたいといふに三の條件がある。

一、所歸の本尊。

二、所求の處。

三、本尊心と合一する方法。

一、所歸の尊格。我等宗教に依りて從來の我は迷にして絶對の眞我ならざるを認め

たり。いかにするも我等はまた現に吾人が頼みに思ふ此世界も我等も永遠に安穩なる事ではできぬ。如何んぞ畢竟して所屬すべき處ならん。されば佛陀は教へ給へり。現世界は唯安樂に耽る舞臺に非ず絶對なる常住の靈界に入るべき修行の道場なり。我等衆生に常住の安寧を與へ給ふ。絶對的の實在者無量光尊に歸命せよ。一切衆生は本法身より稟けたる靈性を有す。是金剛石の未だ琢磨せざる如し。此世界に稟けたる形氣の煩惱の垢質の爲に未だ覆はれてゐる。若し専ら無量光尊に歸命信樂し、聖意に合契すべき念佛三昧に、若しは瞑想、若しは口稱、一心不亂なれば、若しは頓速に若しは漸次に、心意が純熟するに隨て、例へば妊婦の月滿ちて分娩する如くに、靈き心は生れ出でん。聖き心が生れて見れば、從來見來りし娑婆にはあれど、今まで闇の夜中に暮せしのが、今は曉て光明曙光を見るに至り、ここに始めて絶待なる常住平和の無量壽國の人と爲ることが出來て、安心の場所だけは得られた。實に此心の生ることが一大事であつて而かも難關である。然れども本々佛の子なれば慈悲の懷に抱

かれて温まる時は必ず出産難きに非ず。

二、願作佛心。已に佛の子は生れた。生れた儘では未だ全體發育せぬ。慈愛の懷かしき母の顔さへ見えぬ。されども鳴く聲の口に慈悲の乳房は哺まれて次第に肥立ちて眼も見え耳も聴えすべての靈性の作用は漸次發育する。兒は母の慈悲の懷に育まれるに就て斯様な話がある。有ゆる動物中にて人の兒が最母の懷に手を放るるまでの年月が長い。是には何等かの要あるであらう。或人の考には、人の兒が母の懷に抱かゝることの長いのは唯形體の育てる計りでなく、母の暖温な慈悲を以て人の子としての愛てふ高等な感情を養ふ爲めであると。して見れば我等如來の子が慈愛の懷に抱かれて慈父のそれの如くに愛化していと麗しき感情を成生する爲めとすれば、慈父の如來は我等を佛に化す。我等は父の全き如くに向上するを宗とす。

如來が道德心を養ひたまふ慈悲の父母として三の聖德を以て我等に嚴臨し給ふ。三德とは神聖と正義と恩寵と之なり。

如來は獨尊なれども神聖と正義としての父にして恩寵は母に比す。斯三徳が我等が靈徳を養ふ要素一切道德の本源なり。通佛教に謂ゆる法身と般若と解脱との三徳に比すべし。一神聖は如來が一切衆生の嚴肅なる家庭の父として我人の行爲を照鑑し給ふ智慧である。神聖とは行爲を照す智慧なり。如來は天命の性の根本、一切道德律の原則でまします。神聖は明淨なる鏡の如くに如實に衆生の身口意の三業を照し給ふて毫も私なし。如來の神聖なる眞理の光は太陽の如くに外界より照すに非ず、絶對なる大威力者より直覺的に衆生の良心に囁き來る命令の力なり。宇宙には是の如きの道德秩序の理性の存在することは天の軌道に日月星辰が運行する理の在る如しと。例へば天が生物を活すに保護性を賦する如く、又人の生を愛し死を憎む自然性の如くに、宇宙には道德法が存在する故に、實に道德法の原法は人爲的法ではない。故に神聖にして犯す可からざる法則である。

凡て物には自然法爾の理がある。火の熱き水の潤ふ如く、善惡の根本的原理は法

爾として定まつて居る。故に佛教大乘戒の根本とも云ふべき梵網經に道德律の淵源は法性本然の法則にして、一切諸佛造作に非ず、釋尊菩提樹下にて正覺を成ずると直ちに道德律の根本として菩薩の波羅提木叉を結し給ふた。斯道德律の根本は釋尊自ら造りしにあらず、法性本然の眞理なることを現す爲に、梵網三昧に入り給ふた。すると釋尊の本地本佛の境界に成り給ふた。曰く、我今盧遮那方に蓮華臺に坐す。周匝せる千華の上にまた千の釋迦を現す。一華に百億國あり、一國に一釋迦あり、各菩提樹下に坐して一時に佛道を成す。是の如き千と百億とは盧舍那を本身とす。千と百億との釋迦、各微塵の衆を攝して俱に我が所に來至して、我佛戒を誦するを聽いて甘露の門即ち開けぬ。是の時に千と百億釋迦還て本道場に至つて各我本師の戒十重四十八を誦す。戒は明な日月の如く亦瓔珞珠の如し。一切の菩薩衆是に由て正覺を成す。是の盧遮那誦し給ふ。我も亦是の如く誦す。汝新學の菩薩も頂戴して戒を受持せよ。是の戒を誦し已つて轉じて諸の衆生に授くべし。諦に聽け。是正しく佛法中の戒藏、波羅

提木叉を誦すべし。大衆心に諦かに信ぜよ。汝は是當成の佛、我は是已成の佛なりと。常に是の如きの信を作さば戒品已に具足す。一切心あらん者は皆應に佛戒を受くべし。衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。位大覺に同じ已りなば眞に是れ諸佛の子なり」と。

此意は道德律の根本は法性自然の眞理、神聖にしてまたこは普遍的眞理なれば、千聖も交へず萬佛も改めず、大宇宙の中心本尊たる盧遮那佛が有らゆる分身の釋迦を徴集して自ら誦し給ふ。此の神聖と正義とは道德律の根本とす。

人格三位の中後の靈格のみ相待の世界を超絶して絶對の大根底を立脚地とする即ち神の國の人格たる最高等なる道德の歸する處なり。靈格の中三等あり。聲聞と緣覺とは方便にて、絶對なる父の聖意を意として、自とすべてと平等に靈に活き、共に父の全き如くに完成し、同じく常住の平和を得んとの願望を以て目的と爲すは、ひとり菩薩のみ。菩薩は即ち佛の法王子である。

佛陀は道德的最英靈的人格の光明として、自ら最勝無上の大道徳の立脚地に安立し、自己を標準としてすべての子等をして善惡相待六道の迷衢を出でて、二乘偏狹の經を超えて、無上の光明の大道に立てよと絶叫したまふ。斯の菩提大道は一切諸佛聖賢の同一の光明大道なり。過去の諸佛も斯大道より無上大覺の帝都に登り、未來の諸佛皆然らざるはなし。之諸佛通達の最勝道なり。斯大道の終局中心の帝都を蓮華藏王都、盧舍那法王の嚴臨し給ふ處、十方如來一路涅槃の大道、舍那大法王の帝都に通達する大道、亦普賢の行願道と云ふ。一切衆生は本と法王の子なれども、佛性具し乍ら心闇く意拙なくして六道の迷衢に隕ふて曠劫に流轉せり。

佛陀出世の因縁は、一切衆生をして斯無上の大道に誘引して、圓滿なる人格を得しめ一切衆生と共に常住の安寧を得せしめんが爲なり。斯大道のみ最高徳と最幸福の終局する處なり。

如來の神聖正義と人の至誠心

如來は眞理の源にして一切法則の一大原則なり。如來の本體は眞理即ち自性天真なり。此の自體本然の理より發動して天地萬物を成立し、一として自然の理法の條理を失はず。是法爾法然の理は整然として常たり。秋毫の私あることなし。火は炎々として焰上り、水は滔々として低きに流る。法爾の自然は人の私に動かすべからざる天則なり。此の自然の一大元則たる如來心と相應する時は自然に如來心に流入す。水の卑きに流るゝ如く火の高きにのぼるが如し。此の大なる自然法爾の一大原理にかなふべき人の精神は即ち至誠眞實心是なり。

至誠心は人の天より與へられたる人格の首にして實行を支配する理性是なり。人の良心なるものは風俗習慣に規定せらるゝが故に其の風俗習慣の異なるに隨つて良心もまた差なき能はず。然れども天が人格の本尊として賦與せられたる靈性に於ては、世の

習慣の規定上に超然として、人と人との規定に非ずして天と人との調和合一すべきものの之即ち此の至誠心なり。

眞理は天然自性なれば人の動かすべきものに非ず。

此眞理の源なる如來を信仰の照鑑に神聖と觀す。至誠は天に感通すとは天自然と體を共通すればなり。

佛心に相應せんと欲せば肉我の妄心を排除せよ。

三業を指導する意志が至心即ち靈性よりの動機とすべし。三業の動機に四種あり。一、世の法律等の制裁を怖れて。二、他の非難交際上より。三、世間の教育知識上の良心より。四、如來眞理の命令が自己の靈我に命令して。

虚妄の動機は内に自ら制伏するの理性力なけれども、外他人の輕侮と擯斥とを恐れ、表面に賢善を示す。

眞實は眞實心に如來を信じ、愛し、彼の國に生れんことを望むは、眞實に信するが

故に如來の靈應我に感應し感得するを得べし。靈應實に信受するは喻へば米種を播布したるなり。實は核實にして、果の中に核實あるが故に之を播して萌發生成して而して後に花開きよく結果を得べし。眞實の信、眞實の愛、眞實の欲生は全き核實なり。虛假雜毒の害は雜草の如し。

肉我を主とするは神の前に大に非とすべきなれば、一度如來に歸して如來の光に靈化し去て後は、腦髓血肉悉く靈光によりて靈化すべきなり。我等常に如來の慈悲の光を信念し憶念相續して止まざる時は此血肉に薰染し血肉も悉く佛化す。本より如來の慈愛の靈氣は日日吾人が呼吸する處の滯氣これ如來の大靈氣なり、衆生自ら之を識らずして唯の虚空の如くに思へり。まことに是誤れるなり。若し全く如來の慈愛に薰染し靈化する時は滿身是愛たるに至らん。こゝに至つて初めて眞の愛に充さるゝものなり。

道德動機の四階級

道德の説に善惡の標準に就ては學者の説が種々に分れてゐるが、道德の動機即ち不正を去りて正善の行爲を爲す其意志動機にはまた多容である。他律なるあり自律なるあり。獨のウントが道德の動機に四階級ありとの説に倣ひて今道德動機の階級を擧れば、最も卑き動機なるは、世の法律とかまた社會とかの制裁から不正を去りて正しきを行ふあり。若し不正行爲あれば刑法の恐ありまた社會の信用を失ふ。然る時は自己の利害上にもまた名譽にも損失ありてふ意志から打算して、惡を避けて善に就く如きは最低の動機。

次は教育服従の動機。是は全く自己の良心より自覺の上に惡を止め善を作すに非ざるも、教育せられて斯々の事は善にして行ふべし斯々は惡なれば行ふべからずと云ふ如き自覺なき佗の教に律せられたる動機の故に第二階なり。

第三は自己の良心に本づく動機。是は自己の良心が正なり善なりと信じた處は佗の毀譽褒貶に拘らず損徳利害によらず敢行す、自己の良心より出たるは第三階である。

第四は高等なる理想。天とかまた神とか世界已上に道德の根底を置き絶對なる神聖なる實在者の命令が自己の理想に映照せる光が道德の動機とす。先きの良心は風俗習慣に規定せられて、左まで惡ならざる事を習慣は非常な罪惡と謂ひ、また善ならざる事も風習的に良心は意に介せざるあり。故に良心は相待的の善にして絶待にあらず。絶待の實在者より神聖の光明より照さるる理想の道德動機は最高等である。斯の如く其志操人格の中心が高低ある故に道德の動機に階位がある。

神の神聖なる光明より照さるる理想の道德動機は最高等である。斯の如く道德は動機に於てもまた目的に於ても高低あり。例へば普通人道的道德は人としての履行すべき五常を以て安心とし五倫の道を全うする如きは人道的道德にて。之よりは進んで絶對至善なる絶對靈界に至善の歸着點を安置き、天の聖意を我意とし神の道を我道とし

て、高等なる如來地に到達せんと目的に進捗せんか、道德の向ふ處高等なり。

佛陀は自から最高等なる神聖にして道德志操の高等なる玲瓏として自覺覺他覺行圓滿を以て道德的人格を莊嚴して、其人格の光は自から名を聽き形を見る者にて悉く惡を廢め善心を引き非を防ぎ善に就くに至らしむる威徳を備へて居る。故に世の最英傑なり。斯の如き神聖なる道德上の英靈一切天人の歸崇する處たり。故に世英と云ふ。佛陀自から道德上最高等なる處に嚴臨して一切衆生心は自己の道德心の如くに他のすべてに自覺を與へ而して覺行圓滿なる道德上の最高人格に同化せんと欲して是を最勝道とす。自から道德の最終目的の歸着する處は、俗に云ふ神國、至善の處、絶對的道德圓滿完全なる人格の集まる處、神聖正義慈悲の光明輝く處。之を無量光明土と爲す。

世のすべての人類は佛陀は精神的に至善の光明土を實現せんとす。人々全く佛陀の模範に則り彌陀の神聖正義なる慈悲の光明に靈化し人格一轉す。即ちたとひ身は

娑婆に在りながら心は淨土の人となる。

菩 提 心

大乘佛敎にては初發心して法王子と爲ることは發菩提心を本とす。即ち阿耨多羅三藐三菩提心なり。此に上求菩提下化衆生の二心を起す。上求菩提とは向上門にて、願くは我一切諸佛の完全圓滿なる如くに、智徳共に具はり萬徳豐備して缺くこと無き人格に成り度いと願求にて、下化衆生とは一切衆生は本同一の眞性なれば、我と一切衆生を誘ひて共に無上道を成じ、同じく福利を齎し度しとの慾望である。今宗教的に云はば願往生心と云ふ。

願往生心とは願作佛心と願度生心と平等安寧願求心なり。若し吾人の言にて云はば、

願くば如來の中に復活し度し、即ち聖きに生れ度しとの心。

心こころ聖きよきに生なるれば、願ねがくば佛ほとけに作たり度たき心こころ。

佛ほとけに成なりたいとは、一切衆生さいしゆじやうを度たしたき爲ため。

一切衆生さいしゆじやうを度たすことは、願ねがくば一切衆生さいしゆじやうと共に、常住じやうちゆうの安寧あんねいを得え度たしとの慾望よくぼうなり。

此の意志こゝろの決定けつていせしのが即すなはち菩提心だいしんである。是菩提心こゝろが即すなはち最高等さいかうとうなる理想りさうの道德だうとく心しんである。

此菩提心こゝろの四よを擧あぐれば、一、願生心ぐわんしやうしん。二、願作佛心ぐわんさぶつしん。三、願度生心ぐわんどしやうしん。四、願ぐわん平等安樂心びやうどうあんらくしん。



意志の信仰

意志の信仰を菩提心と爲す。是實行信仰にして不斷光に靈化せられて阿彌の聖意實現して活動行動するなり。

已に心情の信仰に於て阿彌の眞我の中に安立し平和なる安靜なる自己の靈福を内面に感ずるも、猶進んで神聖正義にまた恩寵により靈化せる意志として實行を爲すに至らざれば、未だ眞の聖意に協力せしものといふ可からず。此靈化菩提心とはこの阿彌の目的に協つて活動するの意志なり。

消極と積極

心情に世界依屬を超えて阿彌の絶對眞我に依屬すると同じく、意志にも天然意志に屬する方を捨て、轉化せざるべからざる方あり。

世俗情操と娑婆執着と利己主義とは菩提心には不適當として捨離せざる可からず。

阿彌の目的なる無上道心として阿彌の個人として神的活動するは、消極には一切の無上道を沮害するものを除き、積極靈化には阿彌の理想に活動す。菩提心に意志の不道徳を自制自覺に依つて脱却し、實現には菩提心の力行によつて増進す。世俗情操利己主義を離れて無上道心開展して墮落の憂なきに至れば即ち不退轉の無上道心と爲す。即靈化の意志なり。無上道心と云ふも至高善神聖態道德態に外ならず。世間倫理の道德も形式には異なるなきも其内容の動機に於て異なるのみ、實に能く自己離脱して神的靈化の意志を菩提心と爲す。世間倫理の動機は世俗情操にして野卑、無上道心は高等なり。

天然教に所謂道德も徳其ものには別るるに非ざるも唯主義に於て異なるのみ。彼は歸する處世界天然を出る能はず。其情操は動機に於て世俗たるを免れず。唯青史に記せらるるを目的と爲すが如きの主義は程度卑しと謂はざる可からず。天然の人には世俗

てきじやうさう いはゆるにんじやうてきだうとく
的情操は所謂人情的道徳にして、其情操野卑にして其根底が人情を出る能はず。期する處名を後世に貽すと云ふ如きの動機を超えず。道徳其のものの卑きにあらず、其人の情操が卑賤なるなり。

次に進んで天然を超越して世俗動機を出で獨り超然として高く物表に出で、情操高きこと山の如く、志節皎潔にして雪の如く、五欲に對して蛇蝎の如く、道情氷よりも淨なるも、消極の一片のみにして自調自度、以て佗を顧るなし。自ら獨り三界を超えて無爲に到らん爲に導諦を修するものは聲聞是なり。三界を超え世俗を絶ちたる道情なれども、利己主義にして、絶對阿彌の中に立つて、一切衆生と同一心性なれば同一の目的に活動することは、未だ曾て夢にも見ざる處なり。是また大菩提心が甚だ排除すべき情操也。

次に大乘相家空家の菩提心も超然主義にして圓滿なる菩提心道情は立つべきものに非ざるなり。何となれば相家は相待の上に立てる根底なれば一佛乘の圓理を校らず。

空家は夢の中の道情何ぞ眞理の活動あらん。

主我幸福主義の排斥

眞に無上菩提心とは主我を超え、世界規定の天然規定を超え、絶對阿彌の中に立ちて阿彌の個人として其目的に活動して始めて眞の無上道心と爲すべし。主我と幸福主義とは大に排斥すべき道情なり。

論註に無上道心發さざれば阿彌の國に入る能はず、若し人無上道心を發さずして但彼國土の受樂無間なるを聞いて樂の爲の故に生ぜんと願せば亦當に往生を得ざるなり。是の如きの樂を食する幸福主義は世界動機の野卑なる道情にして其意志が阿彌の聖意とは性質が大に異なることなれば往生を得ざるなり。殊に大に誤謬する處は天然の幼稚なる意象より苦樂は皆自己の生理規定と及び自己の主觀にありて客觀に反寫するなるを悟らず。主觀は天然の幸福主義にして、客觀にのみ快樂を渴望する如きは阿彌の

性を去ること遠し。動物祖先の襲世的情慾を打破して理性的精神的道情を發達せしむるにあり。阿彌の理性を以て全精神生活を統括するに至るべし。

俗に云ふ人心道心の中人心なる人的情操を打破して、勇を奮ひ意志を鞏固にして、道德的力行の修練より益々精修して、阿彌の理想を實現せんとその神的欲望より、漸次に修習し、終に鞏固なる性格、阿彌の聖意の個人たる道德最上衝動にして、之を無上菩提心と名づく。完全圓滿なる道德情操にしてあらゆる道德情操の最高等に位す。此の道德情操は表面は個人の如くなるも其の内面には絶對無上道と致一し形而上論の無碍光の個人活動に外ならず。

上求菩提下化衆生

無上道意とは阿彌の一切慧一切能との性能にして、個人に實現して人の發菩提心と爲る。内面致一の故に此道意より阿彌の内容に向つて益々其目的に無限の進歩せんと

欲望するは上求菩提と云ひ、一切の衆生は阿彌の理性たるを自ら意識せずして自ら惑ふて沈淪せんとするを種々方便をもて自己と同じく阿彌の内容に歸入せしめんと欲するを下化衆生と爲す。(この道德的情操即ち無上道意は宗教の生活の心髓にして、又實行的道德の原動力なり。前に述べたる如く主我及利己主義天然の意象を轉じて、神聖的に靈化したる意志が即ち道情操なり。是よりは阿彌の實現として活動す。)

論註に、此無上道心即ち是願作佛心なり。願作佛心即ち是れ度衆生心、度衆生心は即ち衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむる心なり。是故に安樂に生せんと欲する者は要す無上道心を發すべしと。

願作佛心は上阿彌の目的に協力し、度衆生心は本阿彌の理性内の衆生を悉く阿彌の内容に歸入せしめんとす。有佛の國土に生ずと云ふも、身死して後入ると云ふに非ず、意志の轉依を生と云ふ。

論註に、人よく阿彌の法身を意識すれば、世界の衆生は虛妄なることを知る。しか

れば衆生は理性ありながら妄の方面のみに迷ふ、哀れむべし。依て慈悲が生ず。又眞實の法身即ち理性を知れば眞實に阿彌に歸依が起る。衆生の虚妄を知れば慈悲が起る。一方には歸依が起る。依て上に歸依し下に慈悲心ある故方便回向と爲る。菩薩は阿彌の聖意たる一切の功德を施すも、自身利己と幸福主義に非ずして、聖意實現として一切衆生の惡素質を抜いて自己と同じく阿彌の中に開展して歸趣せしめんことを欲望す。

無上道意を發す。彼國土の樂を聞いての自己快樂主義は阿彌に入る能はず。阿彌の理性に協ふて一切衆生と同じく終局に歸せんと欲して、一切の集むる所の功德をもつて一切と共に佛道に向ふなり。

方便とは、菩薩願望す、己が智慧の火即ちあみの慧恩寵開展を以て一切衆生煩惱の草木を燒かんに、若し一衆生として成佛せざるあらば我作佛せずと。然らば衆生未だ悉く成佛せざるに菩薩已に成佛す。譬へば火柵を以て草木を摘で悉く燒盡さんとお

もふに、草木未だ盡ざるに火添已に盡るが如く、其身を後にするに、身は先だつが如し。故に巧方便と名づく。今日く火添は菩薩なり。火は阿彌の慧法界に徧して之に觸るるものとして、信機開展して惑亡せざるなし。方便とは一切衆生を攝取して共に阿彌の國に更生せんと願望す。

遠離三種

一、智慧門。自樂を求めず、我が自身に貪著する主我を捨てよ。智によつて幸福主義は眞理に非ざるを知るが故に求めず。慧によつて主我を捨つ。

二、慈悲門。一切衆生の苦を抜きて衆生を安んずる心なきを遠離せよ。慈によつて衆生の苦を抜き悲によつて衆生を安んずる無き心を離る。

三、方便門。一切を憐む心。自身を供養し恭敬する心を遠離す。正直に衆生を憐みて己が如何を顧みず、自身を遜讓す。

已上約して云はば、幸福主義と主我執とは聖意に適せざるが故に脱せよ。また一切

に於て神しん的てき同情どうじやうなからざる可べからず。此この三種しゆは消極せうきよくの方はうにして、次つぎは積極せききよくの方はうなり。

三種隨順菩提門しゆのずゐじゆんはだいもん

一、無染清淨心むぜんしやうくしん。自樂じらくを求めず、菩提はだいの志し潔けつく清淨心しやうくしんに神しん的てき活動かつどうす。

二、安清淨心あんしやうくしん。一切さいの拔苦はつくを以もつて、菩提はだいは一切衆生さいしゆじやう最終安寧さいしゆうあんねいの處ところ、一切さいの苦くを拔ぬきて阿彌あみの安寧あんねいに攝取せつしゆせしめざるべからず。若もし之これを作なさざれば菩提はだいに違いす。之これを作なすが故ゆゑに順じゆんするなり。

三、樂清淨心らくしやうくしん。一切さいを度とし菩提はだいを得えせしむるを以もつての故ゆゑに、衆生しゆじやうを攝取せつしゆして阿彌あみに歸入きによせしむるが故ゆゑに、菩提はだいは是畢竟常樂これひつきやうじやうらくの處ところ、若もし衆生しゆじやうをして畢竟常樂ひつきやうじやうらくを得えせしめざるは即すなはち菩提はだいに違たがふ。

畢竟安樂ひつきやうあんらくを得えるは大乗門だいじやうもんに依よる。即すなはち安樂佛土あんらくぶつど是これなり。又衆生またしゆじやうを彼國土かのこくどに攝取せつしゆす。故ゆゑに之これを三種隨順菩提門しゆのずゐじゆんはだいもん法滿足ほふまんぞくと名なづく。

智慧ちゑと慈悲じひ即すなはち解脫方便げだつほうべんの致ち一

智慧とは佛知見啓示によりて自己を解脱し、眞我の中に融合して佛の慈悲と致一す。解脱によりて天然の主我と幸福主義を超越したり。唯解脱のみにて之に安んぜばまた幸福主義たるを免れず。之より進んで阿彌の目的に活動すべき天職を果さざる可からず。然れども啓示によるにあらざれば知見の眼なくして菩提の正道いかにして進むことを得べけんや。自ら未だ解脱せず天然の苦惱を解脱すべき理性あるを識らざれば、いかんがしてまた佗に普及する意志を發することあらん。解脱して初めて聖意實現として行動し、佗をも自己と同じく攝化せらるべき事を知る、故にまた佗に及ぼす。智慧と慈悲と方便との三は般若を攝取す。般若は方便を攝取す。般若とは如に達する慧、方便とは權に通ずる智の稱なり。如に達すとは内面に阿彌に致一し、權に通ずるとは客觀の衆生の機を省みて備に應ずる智なり。然れば即ち智慧と方便とは相縁つて動、相縁つて靜なり。謂は智慧は衝動より方便して衆生を度する爲に活動す。智慧なくば度生の道德衝動もあるなし。

亦智またちと方便ほうべんと相係あひよつて靜せいなり。たとへ表面へうめんには神しん的活動てきぐわつどう止まざるも、内面ないめんには阿彌あみの中なかに安住あんぢゆうして寂靜じやくじやうとして照てる故ゆゑに、いかほど神しん的活動てきぐわつどうはげしくも内面ないめんの寂靜じやくじやうを失うしなはず。同時どうじにたとへ内に阿彌あみの常寂光土じやうじやくくわうどに安住あんぢゆうするも、外そとに聖意實現せいいじつげんの活動くわつどうを廢はいせず。故ゆゑに般若はんにはと方便ほうべんとを失うしなはすと。悉ことごとくく是阿彌これあみの主觀客觀兩界しゆくわんかくくわんりやうかいの顯現けんげんに外ほかならず。般若はんにはと方便ほうべんとに依よらざれば菩提ぼだい法成就ほふじやうじゆうすることなし。若もし知慧ちゑなく、即すなはち啓示けいじによりて阿彌あみの内容ないように歸き一きせざれば則すなはち顛倒てんだうに墮だせん。天然てんねんの主我幸福しゆがかうふくに墮おし已おほる。若もし方便ほうべんなくして阿彌あみの内面ないめんに致ち一きに解脫げだつせば、則すなはち實際じつさいを證しやうすとて、單たんに解脫げだつに安やすんじて幸福主義かうふくしゆぎに墮落だらくすべし。是この故ゆゑに應まさに知しるべし。我心貪著がしんどんぢやくじしん自身みづかみと無安衆生心むあんしゆじやうしんと恭敬くぎやうじ自身しんしんとを遠離をんりすべし。主我幸福利己しゆがかうふくこは菩提心ぼだいしんを障さふ。世間せけんに障礙しやうげの相多さうおほし。風かぜは靜せいを障さへ、水みづは火ひを障さへ、五逆十惡ごぎくじやくは人天にんてんを障さへ、四倒たうは聲聞果しやうもんぐわさを障さふ。此三種このしゆは菩提心ぼだいしんを障さふ。

無染三種むぜんしゆあり。

無染清淨心、安清淨心、樂清淨心、此三心を致一して妙樂勝真心を成就す。樂に三種の中法樂は即ち智慧所生樂なり。之佛の功德を愛するより起れり。この三心清淨にして増進するを妙樂勝真心と爲す。妙とは内容佛に致一の故に、勝とは三界の樂に勝出す。眞とは虚偽ならず顛倒ならず、乃至此四種功德によりて阿彌の中に轉生す。菩薩五種法門に隨類して隨意自在成就す。所謂身と口と意と智と方便、智業は隨順法門の故に隨意自在なり。

此五種功德能く淨土に生ず。出沒自在なり。

智情意共に佛知見に解脫し靈化し、自ら知見と靈福と靈化によりて衆生が顛倒せるを見るに忍びず慈悲より度生心、慈悲的衝動起る。

利行満足に五あり。一、近門。二、大會衆門。三、宅門。四、屋門。五、園林遊戲門。初の四を入とし後の一を出門とす。即ち、

一、如來によりて更生して正定聚に入る。

二、啓示を與へられて智力に聖靈を感じ開示悟入す。

三、心情に解脱し眞我に安立して靈福の安宅を得。

四、蓮華藏界に入ることを得。

五、我執俗情を脱し靈化し心靈の聖なる生活をなし、法喜禪悅の聖食に妙味を糧とし、如來神聖正義の靈衣靈服を纏ひ如來大慈悲の室を家とす。

柔和忍辱の衣、智慧と慈悲と方便を以て生死の園、煩惱の林中に回入し遊戲神通を以て教化地に至る。應化とは法華普門示現の類の如し。

回向。

之に主觀客觀二種あり。自己主觀が阿彌の終局目的に活動するは向上門即ち往相なり。次に客觀界に神的活動して菩提の行爲陀をして攝化しむるは還相また向下と云ふ、利陀とす。所謂大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して生死の煩惱の林に回

入し遊戯神通悉く阿彌の實現として衆生を化す。之を還相と名づく。無上菩提即ち阿彌の目的は法界に徧在して一切を終局に攝化せしむる性能なり。されば吾人がこの大勢力と致一するを發菩提心と名づく。この無上道態は絶對なれば、一切衆生同一の理性が最深に具有し、依つて自己の如く一切をして悉く攝化せしめんが爲に方便活動するを利佗と名づく。自利利佗共に同一阿彌の性能の主觀客觀の兩界に變現したるに外ならず。

故に註に無上道とは此道。理を窮め性を盡して更に過るものなし。正は聖知徳相なり。法相無相の故に聖知は無智なり。正徧知とも云ふ。一聖心徧く一切の法を知る。二法身徧く法界に滿つ。若しは身若しは心徧せざる處なし。道とは無礙道なり。經に云く十方無礙なり、一道より生死を出づと。一道とは無礙道なり。

無上菩提門

之は約して言はば、消極には、天然の主我と幸福即ち快樂主義は人情的にして情操野卑なれば、金の鑛垢あるが如くにして、人の天然人情的垢質を去りて超然たる高尚の理想となる。

また聲聞主義とは天然を超えたる消極的にして利己主義、阿彌の徧眞に歸入して、聖意實現の勢能を知らず。

次に超然主義の菩薩は時間的に阿彌を遠く三祇の後にあらざれば致一せず、又は空間的に十萬億土を経ざれば融合する能はずと。況んや其實現的活動をや。

今圓具教は、絶對阿彌の一切慧能の性能中の衆生なれば、天然の主我及びすべての適せざる垢質脱却すれば、即ち阿彌の理性聖意實現として、理想的に目的中に活動し、自己のみならず、衆生を同一理性の阿彌の個々なれば、自他の差別なく同一の慈悲をもて、自己の阿彌彼を照し彼の阿彌是を誘ひ、主客同一の大道態、終局絶對に歸入す。然れども其本體は無窮に常に活動する無上道態なり。